

Title	ピューリタンの楽器：エドワード・テイラーの詩と音楽
Sub Title	In Broken Notes I Sing' : poetry and music of Edward Taylor
Author	佐藤, 光重(Sato, Mitsushige)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.327(54)- 347(34)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0347">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0347</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ピューリタンの楽器—— エドワード・テイラーの詩と音楽

佐藤 光重

バロック音楽の巨匠バッハの音楽に感動をおぼえ、その神秘を探ろうと思えばまちががなくシュヴァイツァーなる人物と出会うことであろう。大著『バッハ』を遺し、モノラル・レコードでいまも接することができる数々の名演奏を世に贈ったこのひとこそ、『水と原生林のはざままで』によって知られるアルバート・シュヴァイツァーである。牧師の職をなげうって仏領ガボンに身を投じた彼は医師であったのはもちろんのことすぐれたオルガン奏者でもあり、なおかつカント哲学やゲーテ文学にも通じていた。

他方、1668年マサチューセッツ植民地へ渡航し、71年から1729年に87歳で死去するまで Westfield の牧師を務めた Edward Taylor も詩人、博物学者、医者、錬金術師などさまざまな顔をもつ。この多才な詩人の全貌をとらえるには、多様な好奇心に通底する彼の探求の目的を把握することが必要であり、それを把握すればさらに、彼の新しい一面が浮びあがって見えてくるであろう。

## 1 学究の徒テイラー

テイラーは複数の顔を持つ。なによりもまず慣れない土地でのきびしい生存のためには、当時はだれでも農業や牧畜の知識と技術とが必要であった。彼も例外ではなかったらしく園芸の用語が作品にしばしば登場し、とりわけ薬草の名が多くあらわれる。これは彼の医学知識を窺わせて興味ぶかい<sup>(1)</sup>。作品には万能薬 (Catholicon) も登場し、永遠の生命を探求する

錬金術と手を携えていた当時の医学をしのばせる。錬金術の研究対象は金属はじめ自然界の物質および生命が含まれていて甚だ幅が広い<sup>(2)</sup>。このほか彼には博物学者の側面もあり、1705年7月30日 *Boston News Letters* の記事で、巨大な骨がニューヨークで発見されたことを知ると、テイラーは熱心にその情報を収集しながら、196カプレットからなる叙事詩 “The Great Bones of Claverack” (未完) を書き始めた<sup>(3)</sup>。その他にも自然界へ関心を向けていた証拠に、英国からの渡航中に目撃した様々な生物や出来事の記録が日記に見える。

もちろんテイラーの著作に漲るものは信仰心であるのは言うを俟たず、教会員制度をめぐる Solomon Stoddard とキリスト教神学上の熱い論争を繰り広げたことで彼はこれまで知られてきた<sup>(4)</sup>。彼の詩が発見されたのは20世紀に入ってからであるが、文学テキストの解釈においてもニュー・イングランドのピューリタニズムから作品を見る方法が研究の主流である。とくに John Cotton, Increase Mather, Samuel Mather などマサチューセッツの宗教界で支配的な影響力をふるったマザー一族の著作とテイラーの作品とを比較してこれまでいくつか重要な論文が発表されている<sup>(5)</sup>。けれどもテイラーには博物学者としての顔もあり、その面の理解は牧師である彼の理解をさらに深めることになろう。

王立科学アカデミーの会員で数々のアメリカ見聞録を書き送ったことで知られるひとに Cotton Mather がいるけれども、彼の報告書はことごとく伝聞にもとづいて書かれたものであった。植物が交配する事実は、インディアンが古くから知っていたのをたまたま彼が耳にしたものであり、種痘も彼が発明したのではなくアフリカで行われる民間療法を黒人奴隷から教えてもらい、参考になればとアカデミーへ報告したに過ぎない (Kilgour 126-33)。これとくらべればテイラーには観察態度と呼びうる姿勢が認められる。ニューヨークで発掘された巨大な骨に向けられるテイラーの視線を重要視する研究もある。さらにまたアメリカへの航海で目撃した鳥や魚のようすを日記によく残していることが Lawrence L. Sluder により指摘されている。一例を挙げよう。

Wed July 1, 1668 About sunset we saw a fish rise, spouting water out and leaping out of the water, as big as a huge horse. Some took it for a young whale, some for a grampus; our master a thresher. (qtd. in Sluder 266)

テイラーは目で見た (we saw) ことを書き、他の意見 (Some took it for . . .) を参考にする。作品全般においてもテイラーの博物学者らしい態度が読み取れると Sluder は言う。

万能薬を追求するときのテイラーは医師でもあるが、今日の観点からすると異端の魔術師であったとも誤解されかねない。なぜなら、薬に使う目的で彼は詳細にわたり人体を調査していたからである。乾燥した遺体の一部を薬に調合することもかつては珍しくなく、ミイラなどは薬剤にかぞえられた。人体を薬に使う発想は東洋でも唐代の『本草拾遺』にかぎらず魯迅の短篇「狂人日記」や「薬」、我国でも芥川龍之介「湖南の扇」にみられるように民間療法では20世紀にも存続する。ヨーロッパではパラケルススの医学がもっぱら人体の効能を説き、その学説はキリストの「血と肉」をめぐる聖餐の問題ともからんでいた (Gordon-Grube 201-04)。テイラーが医療の参考としたのは Johann Schroeder の *Pharmacopoein Medico-Chymica* (1644年) であり、彼はこれを書き写して109種の「動物」に関する効能の注解書とした (同上192-96)。ネズミの糞、牛の尿、小犬の胆嚢を粉末にしたもの、小犬の白ワイン漬け、焼いた蟊蛙、黒猫の頭の黒焼きなどおぞましいリストにならぶのは人体の項目である。髪、爪、耳垢、汗など、(なぜか男の) 尿、大便、精液、睾丸、女性のおりもの、後産、そのほか血液、皮膚から文字どおり骨の髄まであますところなく効能が記される。まことに気色悪い話であるが、当時はミイラを扱う専門店さえ存在したのだからしかたがない。これでも永遠の生命をめぐる真面目な取り組みではあったのであろう。

永遠の生命については「生命の樹」なるものもあり、これに触れると不老不死、回春、復活の能力が備わるとされる神秘の植物である<sup>(6)</sup>。テイラーは115ページにわたる金属学の覚書きを遺したが、その種本は John

Webster の *Metallographia* (1671) であることがわかっている (Fattore 233)。同書によると金属は地中に液体で存在するときがもっとも神秘的な力を秘めるとされ、金がこの液体から生じるばかりかこれに触れると他の非金属も金になると言う (同上234)。ようするに錬金術に通じる書物なのである。金属の性質は天体の「影響」により形成され、たとえば金などは太陽の影響を受けてできると説明する (同上204)。*Metallographia* とテイラーの作品との関連をつきとめたファットーレによると、テイラーの作品では太陽 (Sun) がすなわちキリスト (Son) であるため、太陽の性質を帯びた金は癒しの効能をもち復活の奇跡も起こるといふ。地中に潜むとされる液体の金はちょうど樹状図をなすと考えられたため、テイラーの詩に現れる生命の樹はひょっとするとそれを指すのではないかとファットーレは指摘する (204-05)。

じつはこれら多彩な研究課題がテイラーの詩に取りあげられるそのつど、関連してしばしばテイラーが扱うもうひとつの分野がある。それは音楽である。

## 2 作品の音楽性

演劇や絵画とならび音楽はピューリタン社会で盛んであったとは思われない芸術活動であるが、彼らがカルヴァンのみならずルターが起したプロテスタントの一派であることを考えれば、あながち彼らも音楽と無縁な存在ではなかったのではあるまいか。まず、宗教音楽といえば誰もが思いつくものに賛美歌があり、ルターが着手した布教のための重要な作業は聖書のドイツ語訳のほかに賛美歌の編纂があった。ルターの仕事はバッハによりクラシック音楽の一大体系となり、メンデルスゾーンやマーラー、シュヴァイツァーやグールド、リヒターなどの天才奇才らが歴代に渡ってバッハ音楽を復興、発展させたおかげで今日の我々もバッハを通じそれとは知らずプロテスタントの音楽文化に接している。ルターの詩にもとづく『カンタータ第四番』(BWV4)などはバッハの傑作に数えられる。バッハのオルガン作品においてフーガと双璧を成す「コラール」も、『広辞苑』に

記載のあるとおりルターが礼拝の音楽に用いたのが起源である。ルターの改革はメンデルスゾーンの有名な交響曲にも扱われた。コロムビア制作のデジタル録音『J. S. バッハ教会暦によるオルガン・コラール集』の帯には、Helmuth Rillingの演奏を評して「ドイツ・プロテスタントの精神を伝える」名演とある。教会音楽は大聖堂で荘厳なミサを執り行うカトリックばかりではなくプロテスタントにも伝統を確立しているのである。

もちろんプロテスタントの文化がすなわちピューリタンの芸術にひとしいとは言えないけれども、ピューリタンにもやはり賛美歌はあったのである。それはアメリカで最初に出版された書物にあらわれている。三人の牧師 Richard Mather, John Eliot, Thomas Weld が詩編をヘブライ語原典から翻訳した *The Bay Psalm Book* (1640年) がそれである。文章の装飾性を嫌うピューリタンが独自に編み出した文体 (Plain Style) で書かれているため、意味は忠実にたどっているが、言葉の響きが犠牲になって、欽定訳にくらべると文章がぎこちない。そのためハーバードの学長 Henry Dunster らが改訂した1651年の版ではより美しい響きになるよう書き換えられた (Elliott 227-28)。植民地の詩人 Anne Bradstreet, Michael Wigglesworth, そしてテイラーなどこの賛美歌集の影響を受けなかった詩人はいない。原典に忠実なればこそ、詩編は読むものであると同時に歌うもの、ダヴィデの歌、そして音楽と捉えられよう。ニュー・イングランドを代表するピューリタンの牧師ジョン・コットンは *The Bay Psalm Book* 初版に序文を書いたほか、雅歌 (ソロモンの歌) の注解書 *A Brief Exposition of the Whole Book of Canticles* (1642年) をロンドンで出版した。これまたアメリカのピューリタンに宗教と音楽との融合がみられる一例である。

テイラーの詩から、ピューリタンが詩編や雅歌をどのように捉えたか推測することも可能なのではあるまいか<sup>(7)</sup>。そもそも詩編のテキストは弦楽器の調べに合わせた歌であった。たとえばテイラーの Med. I. 18 を締めくくる句 “Altaschath Michtam, in Seraphick Tune” は詩編第57, 58, 59, 75 章の冒頭からの引用で、「ほろぼすなかれ」と呼ばれる音楽の節回しのこ

とであり、Med. I. 46にみえる “My mean Shoshannim may thy Mich-tams raise” の “Shoshannim” は詩編第45および69章の冒頭に出る「百合花」という名の楽器を指す。テイラーが自身の作品をどのようにみていたのかといえば、Med. II. 18 “Let thy bright Angells catch my tune, and sing't/ That Equals David Michtam which is in't” に明言されており賛美歌である (65-66)。詩編を題材とした詩には Med. II. 7 “He sent a man before them, even Joseph, who was sold” (PS. 105.17) があり、詩作する自らを神の楽器にたとえて詩人を天上の調べを奏でる者と見ていることが “Scouer [polish の意] thou my pipes then play thy tunes therein . . . While thy sweet praise, my tunes doth glorify” (40-42) と表現しているところからも分かる。

雅歌を扱った詩は特に多く、Med. II. の全167作品の方々に見付き、115から153番までは連続してソロモンの歌からの引用を主題とする。ここでもやはり詩人は神の楽器であり、詩は神を賛美する歌である。たとえば Med. II. 120では “Orecoming [overcoming] notes that fill my Harpe with tunes” (48) と賛美の調べがハーブと化した詩人にこだまし、Med. II. 160でも自身を主の楽器「百合花」“Mee your Shoshannim” (40) と呼び、 “I'll borrow heavenly praise for thee my king/ To sacrifice to thee on my Harps sweet string” (48-49) と天上の音楽を奏する。ただし詩人が神聖な楽器となり主を褒め称える調べを奏でる様子にはつねに、“if” ではじまる条件節が導く帰結節に述べられるので、テイラーは完全には主の道具に成りえていないし、詩も天上の音楽の域に達してはいないことになる。けれども、その文脈から詩編や雅歌を理想の音楽と見なし、それを雛形とした自作の詩も不完全ながら神を賛美する音楽を目指しているのだろうことだけは分かるのである。

テイラーは己が身を楽器にたとえたが、身体はときに文字どおり楽器となる。赤道直下のアフリカでもシュヴァイツァーの腕前が衰えないようにと、パリのバッハ協会は「水と原生林のはざま」までオルガンを輸送したという (『水と原生林のはざまで』39)。もちろんテイラーにはオルガンな

どなかったであろうが、楽器なる概念が今日とは違っていたことを考慮すると、ある意味においては植民地にも立派に「楽器」が存在したことになる。我々にとって声楽と器楽との区別は自明の事柄である。しかしポエティウス以降の伝統的な音楽観に則れば、ひとの喉も楽器の一種となる（金澤70-71）。Magister Lambertusによる音楽論 *Tractatus de musica* (1270?) によると、楽器には二種類あって、そのひとつは「実用的な器具」*instrumentum practice* であり、もうひとつは「理論的な器具」*instrumentum theorice* であるが、後者は金澤氏によると音の実験に用いる器具であると推測される(70)。前者「実験的な器具」はさらに「自然の器具」*instrumentum naturale* と、「人工の器具」*instrumentum artificiale* とに分類され、喉は自然の器具に、その他の楽器は人工の器具に分類される(同上)。つまりは人工の楽器に対し神が作った楽器こそが人間の発声器官となる。ひとの喉は優れた楽器であった。現に音楽の世界では *musica instrumentalis* を「器楽曲」と訳すよりも、「器具の音楽」もしくは「道具の音楽」とすることのほうが多く、今日とは異なる「道具」の意味を強調するという(同上71)。すると、詩が音楽で声が楽器ならば詩の朗唱は楽器の演奏と等しい。Med. II. 48の終りに“*My Quill makes thine Almightiness a String/ Of Pearls to grace the tune my Mite* [卑小な自分] doth sing”とあるように、テイラーの詩句にはしばしば歌っていながら自ら楽器となり、楽器でありながら自ら歌う描写が現れる。してみると、テイラーは自身を楽器にたとえたと解釈するだけでは不充分であろう。神の道具である詩人は、また自ら歌う楽器でもあった。

中世の視点から考えるならば、そもそも「音楽」そのものについての考え方が現代とは異なる。演奏もさることながら根本的に音楽とは数の関係に成り立つ調和であり、耳には聞こえなくとも調和が成り立つ数の関係があればそれはすでに音楽であった(金澤71)。起源はピタゴラスにさかのぼるとされるもっとも基本的な数比関係は2:1(完全8度, 1オクターヴ), 3:1(完全12度), 4:1(2オクターヴ), 3:2(完全5度), 4:3(完全4度)の五つだが、もちろんここから調律は複雑な体系へと



発展する。これらの数比関係の基になっているのは自然数の1, 2, 3, 4で、合計10となる。完数（それ自身以外の約数の和がもとの数と等しくなる。6であれば約数1, 2, 3の合計がやはりもとの数6となる）の6, 28なども神聖視された（Brumm “‘Tuning’ the song of Praise” 104-05）。聖アウグスティヌスからはこれにカバラ的な数字学（Numerology）も関わってくる。すると3が三位一体を表し、4が四つの福音書、あるいは四季、四元素、方位、人間の四段階などを指し、7が天地創造の日数を示すといった具合に数字ひとつにも象徴的な意味が付与されるようになる（同上106-07）。音符には長音と短音のふたつしかなかったノートルダム楽派を例にとるならば、短音は長音を半分にするのではなく三分割にするため、今日から見ると不便なことと同じ短音でも長音の3分の1と3分の2との場合があった。なぜ三分割かといえは三位一体を象徴するのが「完全な」分割法とされたからである（金澤135-37）。

バッハも数字には凝っていた。1745年にヘンデルが音楽學術協会で11番目の会員になったことを受けて入会の意志を固めたバッハは、それでも実際にはわざと二年間入会を遅らせて、14番目の会員となるのを待った。この理由はいかにも数字を重視したひとにふさわしく、ラテン語でアルファベットを数字に置き換えるとBACHは2 + 1 + 3 + 8で14となり、さらにはフルネームを数字にすると158で1と5と8を足しても14となるからなのである（du Bouchet 124-25）<sup>(6)</sup>。14はかねてから意識され、『平均律クラヴィーア曲集』での最初のフーガ（BWV 846）の主題も14の音符か



（譜例1 『平均律クラヴィーア曲集 第1巻』「フーガ1」BWV846）

らなり（譜例1）、最後のオルガン・コラール『汝の御座の前に、われはいま進み出で』（BWV 668）も最初の行は14の音符、メロディー全体で41の音符になる（同上）。

『神の時こそいと良き時』（BWV106）などは歌詞 “Es ist der alte Bund/ Mensch, du mußt sterben”（こは旧き契約の定めぞ、人よ、汝死なざるべからず）に使われるアルファベットを数字に置き換えた数と使われた音符の数が626で一致する（イルシュ193）。通奏低音に使われる音符の数をたよりにして『マタイ受難曲』（BWV244）に秘められたマタイ伝と詩編との予型論的対応も発見されている（シャイエ194-95）。たとえば第2曲、イエスが十字架にかけられる日が近いことを告げる場面、使われる音符の数は7である（譜例2）。

（譜例2 『マタイ受難曲』 BWV244第2曲）

そこで詩編第7章を見ると第14節に、あたかも神の子を処刑せんとする人を指すがごとく、“Behold, he travaileth with iniquity, and hath conceived mischief, and brought forth falsehood” とある。第9曲では、ひとりの弟子が自分を売ると述べる場面では音符の数が5なので詩編の第5章を探すと第6節には“Thou shalt destroy them that speak leasing: the Lord will abhor the bloody and deceitful man”となっている（譜例3）。

Jesus  
Wehrlich, ich suche: Einer unter euch wird mich ver-rä-ten.

1 2 3 4 5

(譜例 3 同上第 9 曲)

さらにひとつだけ例を挙げると第14曲, イエスが弟子たちに, あなたがたはわたしのために苦しむことがあるだろうが, わたしは蘇るであろうと伝える場面で, 通奏低音の数は34である (譜例 4)。

Jesus  
In die-ser-Nacht wer-det ihr euch al-le-ir-gern an mir.

vivace

Denn es ste-het ge-schrie-ben: Ich wer-de dem Für-ten schla-gen, und die Scha-fe der Her-de wer-den sich zer-streu-en.

3 4 5 8 12 16 20

moderato

Wenn ich a-ber auf-er-ste-he, wül-lich vor euch hin-ge-hen in Ga-li-li-en.

21 22 29 30 31 32 33 34

(譜例 4 同上第14曲)

詩編34. 19にも “Many are the afflictions of the righteous: but the Lord delivereth him out of them all” と, 同様の内容となることばがあらわれる。

テイラーの詩に潜む数のからくりも解明されている。まず, Karen Gordon Grube は数字の7に注目した。Preparatory Meditations (1st ser.) に取められた作品数は49すなわち7の二乗であるのは偶然ではなく, その証拠に Med. II. 21の作品を見ると7を「神に選ばれた」数と捉えていたことが分かる (231)。

Each Seventh Day a Sabbath Gracious Ware.  
A Seventh Week a yearly Festivall.  
The Seventh Month a Feast nigh, all, rich fare.  
The Seventh Yeare a Feast Sabbaticall.  
And when seven years are seven times turnd about  
A Jubilee. Now turn their inside out.

What Secret Sweet Mysterie under the Wing  
Of this so much *Elected number lies?*  
(7-14, emphasis mine)

つづいて Ursula Brumm は1980年の夏にベルリン自由大学でテイラー研究セミナーを開き、学生とともに作品群の数字学的読解に取り組んで成果を挙げた。詳しい内容はブラムの論文に譲るとして、ここでは一例だけ紹介すると、完数の番号に当たる Med. I. 28には28にまつわるからくりが仕掛けられている。作品に使われた語数をブラムがかぞえたところ全部で252となり、これは280-28であり28が意識されているのは明らかである（“‘Tuning’ the Song of Praise” 107）。ちなみに語数の252は Bede が計算した太陽と月との間の距離252,000スタディアにもつながる。この距離はちょうど地球と月との距離の二倍であるとされていた。こうすると二つの距離の比が2：1つまり1オクターヴの比率と等しくなり、音楽は宇宙の調和を表現すると考えた当時の観念と合致するのである（同上）。

さらに詳しく作品をみてゆくと、いくつかの単語が意図的に繰り返されていることも分かった。キリストの恩寵にあずかる詩人は「器」“Vessell” にたとえられて、次のパターンで繰り返される。第二連“Although I but an *Earthen Vessell* bee/ Convay some of thy Fulnes into mee” (11-12, 強調著者)で最初に現れ、第三連“Although its in an *Earthen Vessells* Case,/ Let it no *Empty Vessell* be of Grace”(17-18, 強調著者)では二回使われ、第四連になると“Although I’m in an *Earthen Vessells* place,/ My Vessell make a *Vessell*, Lord, of Grace” (23-24, 強調著者)

と三度言い換えられ、最終の第五連では“*My Earthen Vessell make thy Font also*”と始まり一行置いて、“*Thy Drops will on my Vessell ting thy Praise./ I'll sing this Song, when I these Drops Embrace./ My Vessell now's a Vessell of thy Grace*” (28-30, 強調著者)と四回出てくる。

以上を足すと  $1 + 2 + 3 + 4 = 10$  で、ちょうどピタゴラスが基礎に据えた四つの数の合計となる (同上109)。このうち“*Earthen Vessell*”は穢土の塊にすぎない人間の立場にある詩人を表すが、ちょうど地上世界の構成要素の数である4と対応するかのごとく四回使われる。十字架上のキリストが流す汗はルカ伝22. 44 “*And Being in agony he prayed more earnestly: and his sweat was as it were great drops of blood*”とあることから“*Drop*”もしくは“*Drops*”と書かれてやはり四回繰り返される。数字の4に対して、ひとの罪を贖う神の恩寵“*Grace*”は七回 (選ばれた数) 現れる。罪深きひと、もしくはひとの罪を象徴する4と恩寵を暗示する7を掛けると作品番号の28が得られる仕組みになっている (同上109-11)。このようにテイラーは数字のからくりを仕掛けて神秘の調和を作品に込めたのだらうとされる。

神の創造した世界は数字で表現される秩序にもとづき、音楽にたとえられる調和が成り立っている。テイラーの作品に窺うことができる中世以来の世界観は、つとにブラムにより指摘され、イエスが演奏家で詩人が楽器となる構図にも言及がある (同上115-16)。けれども、ブラムはテイラーの作品に現れる音楽や調和を形而上学的に捉えてはいるものの、アウグスティヌス以降に確立された宇宙観をそのままテイラーにあてはめただけで、正統的な音楽観とテイラーの思い描く音楽とのずれ、テイラーの特殊性には無頓着なようである。じつのところブラムはダンテやスペンサー研究で成功したカバラ式の読解をテイラーに応用した結果、さいわいにもそれなりの成果を挙げることは出来たのだが、その方法はまず数字学を持ち出し、あらかじめ決めた枠組でテイラーを読んだのであり、いささか演繹的と言わざるをえない。たしかに17世紀後半には宇宙の調和について体系化した考えがあったのであろうが、はたしてテイラーの作品群から出来合

いの整った音楽世界が立ち現れるかどうかは、留保を付す必要があろう。信者にとり聖書は神の言葉であり、解釈するにあたって全編にわたる有機的な統一を読み取り神の存在を感得するのも当然である<sup>(9)</sup>。しかしテイラーの作品にまで聖典のごとき秩序を見出したのはブラムの深読みであろう<sup>(10)</sup>。なぜなら、詩人は作品をけっして神聖視してはおらず、みずからを調律のはずれた楽器と考えたからである。墮落したアダムの末裔のひとりであるとの自覚から、彼はひとが失った理想の調和をこわれた楽器で追求した。彼の音楽は形而上の要素ばかりではなく、形而下の側面、あたかも職人が持ち前の勘で楽器をこしらえているような手探りの感触がある。広くテイラー流儀の錬金術、医学、博物学などを視野に入れてみれば、むしろそうした学問追求の路線に彼の音楽は位置するように思われる。調和は天上で獲得するのではなく地上で試行錯誤した末にひょっとすると獲得できるかもしれない——調和の探求は錬金術に似た試みだったのではあるまいか。そこで博物学、医学、錬金術が窺われる作品を通して彼の音楽観を捉え直してみたい。

### 3 こわれた楽器

昆虫記のおもむきをたたえる寓意詩 “Upon a Spider Catching a Fly” では<sup>(11)</sup>、蜘蛛（悪魔）のわなにかかった蠅（罪深きひと）が神によって救われると、突如として蠅はナイチンゲールのように賛美歌を朗唱する。

We'l Nightingail sing like  
When pearcht on high  
In Glories Cage, thy glory, bright,  
And thankfully,  
For joy.  
(46-50)

蠅とナイチンゲールとではちぐはぐな取合わせに見えるけれども、これはちょうど日本語でいう「月とスッポン」のようにはなはだしい優劣の差を表す。地上で人間が試みる音楽と天上の音楽とはかくも隔てられたもので

あるとの認識が窺えよう。墮落したひとの技では楽園を取り戻すことがむずかしい。けれども詩人は音楽の追求を放棄しない。蠅に神を賛美させるストーリーの展開は、*Gods Determinations* に取められた別の作品にもふたたび現れるのでこちらも合わせて考慮したい<sup>(12)</sup>。“An Extasy of Joy Let in by This Reply Returned in Admiration” で注目すべきは、一方に永遠を象徴する天上の音楽があり、他方で神の音楽を求め試行錯誤する研究家の姿が蠅に読み取れることである。ここでもまずは天上の音楽を見出すことがひとの能力ではきわめて困難である様子が語られる。詩人は「一万の心を持ち、一万倍にしても」“Had I ten thousand times ten thousand hearts” (5), さらには「その心がそれぞれ、一万の舌をもっても」“And Every Heart ten thousand tongues” (6), 天上の調べのほんの切れ端を「吃るだけ」“I should but stut” である (7-8)。神の楽器たるにはあまりに「ゆっくりと、ゆるみ、遅れ、無感覚に」“how slack, slow, dull? with what delay” (81) 調律されている。「自然の器具」である喉がうまく歌声を出せないのは、人間が「木の実をよしとして盗んで食べ、その芯が (中略) 喉につまった」“he robbing, eat the fruit as good/ Whose Coare hath Chokd him and his race” (53-54) からである。にもかかわらず詩人は神を賛美する術を追求し続ける。だからこそ楽器としての詩人を神が調律してくれるよう嘆願するのである。

Screw up, Dear Lord, upon the highest pin:

My soul thy ample Praise to sound.

O tune it right, that every string

May make thy praise rebound.

(77-80)

キリストが救いの手を差し伸べて「わたしは、人間の血を清め、あの芯を、人間の喉から抜きとりましょう」“I'll purify his Blood, and take/ The Coare out of his Throate” (63-64) と言われる。語り手は一方で「わが旅路の果てに (中略) いと美しい調べを、われを忘れてうたおう」“at my journey's end . . . [I will] sing . . . In Ravishing tunes most sweet”

(89-92) と宣言し、天上の音楽がこの世では発見できないものとあきらめているように見えて、しかしながら他方ではたとえ拙くても、人生の途上にある詩人は「きれぎれの調べ」「broken notes」を歌うと決意する。

Yet Lord accept this Pittance of thy praise  
Which as a Traveller I bring,  
While Travelling along thy wayes  
In broken notes I sing.

(84-87)

テイラーは天上の音楽を想定するかたわら永遠の音調を地上で探求しているのであって、音楽はかならずしも彼岸のものとなりきらない。いまだ錬金術のような神秘的ヴェールに包まれている感は拭えないが、天上の調律はテイラーにとって学問的な研究対象のひとつとなっている。「もし全世界が蒸留器の中にあり、その霊〔スピリット〕を血の汗としても」「If all the world did in Alimbeck ly,/ Bleeding its Spirits out in Sweat”(9-10)、一匹の蠅に神の賛美歌を囁かせることもできない “It could not halfe enlife a Fly/ To Hum thy Praises greate” (11-12) と語り手は述べる。にもかかわらず、一匹の蠅が天上の音楽を追求する姿がこの作品全体に窺える。

不老不死の薬「ミイラ」を扱う作品では、永遠の生命を得る者が、永遠の讃歌を神へ捧げる。Med. II. 40最終部で語り手は “When thy Preheminence doth ply this pin,/ My Musick shall thy Praises sweetly bring” (42-43) と自分が神の調律する楽器になることを願う。おなじく Med. II. 81でも締めくくりに詩人は音楽を奏する能力が授かるよう祈る “If I be fed with this rich fare, I will/ Say Grace to thee with Songs of holy skill”(65-66)。ミイラから採れる薬 “this rich fare” を服用して永遠の生命を獲得することで、天上の音楽を演奏する力も備わってしまう。ミイラは薬であると同時に宇宙の調和を発見する鍵ともなっている。

生命の樹に接がれて蘇生する信者を描いた作品も、ほとんどが天上の音楽を求める詩句で終わる。しかもテイラーは *Preparatory Meditations* の



第一集よりも第二集になってからのほうが、永遠を音楽で象徴するようになった傾向が強い。Med. I.では生命の樹を扱った詩が少なくとも五つあり、そのうち音楽の話題に触れるのは二つであった。これがMed. II.になると、生命の樹を扱った作品七つのうち五つまでもが音楽へとテーマを発展させる。たとえばMed. II. 16では、信者が生命の樹へと変身を遂げるならば主の遣わされる鳩が枝にとまって天上の調べをさえずるであろうと想像する。第49番の作品には奇抜な発想が見られ、不毛の実にすぎなかった信者が生命の樹に繋がれることで甦り、ふくらんだ実が賛美の音を立てる。第56番にみられるように生命の樹が神の業のたとえとなる場合もあり、御業によりふたたび実を結んだ信者の樹は賛美歌を朗唱する。ミイラを扱った第81番には生命の樹も現れることから、万能薬と生命の樹との主題が永遠の生命をめぐる探求の同一線上に存在することを示す。この作品も最後に音楽の話へ移るのでやはり調和の発見が錬金術の延長にあることが明らかとなる。神との合一を調和で表現する第113番では、キリストによってひとと神とが「共鳴」すると“Godhead, and Manhood harmonize in thee”(44)、イエスは樹の根へと変わりひとは枝と化し“Make me thy branch, be thou my root thyselfe”(50)、ここにおいて“let thy Grace root in my heart”(51)と主の恩寵が信者の心に「根ざす」。合一の境地にある生命の樹からは甘美な調べが流れる“My sweetest musick shall thy praise display”(54)とあるところからも、生命の樹を獲得することがやはり天上の音楽へ参与するための手段であることが分かる。

テイラーの詩において音楽は永遠の象徴であるとともに、医学や錬金術、博物学とおなじく永遠の生命を探求する学問でもあった。ちょうどネオ・プラトニズムの世界で大宇宙と小宇宙とが共鳴するように、テイラーの音楽では形而上的な天上の調和と形而下にある神の楽器・詩人とが共存する。彼は理論的に数字の神秘を表現しただけではなく、詩を編むことで天上の音楽を獲得しようと試みた。幅広い（疑似）科学への好奇心に支えられ、言葉と宇宙とを結ぶ神秘の詩学を模索したテイラーは、『ユリイカ』

を構想した詩人であるポーを髣髴とさせる。Austin Warrenは同時代の形而上詩人とテイラーとのイメジャリーの用法は異なるとして、彼の作品を「植民地のバロック」と定義した。バッハのカンタータのように聖書の詩句を宇宙の調和で表現しようとしたエドワード・テイラーの作品は、まさしく言葉で書かれたバロック音楽であり、詩人は自身を神の楽器と化して荒野の賛美歌を演奏していたのである。

## 注

- (1) テイラーの園芸知識に関しては、C.R.B.Combellack, William J. Goheick および Alan B. Howard を参照。
- (2) 当時の医学と錬金術とは分かちがたく結びついており、たとえば万能薬は治療の目的から見れば医学の範疇に入るけれども、調合の探求でもあるのだから錬金術と見なしてもよい。テイラーの作品に現れる万能薬に関しては、Joan Del Fattore, Karen Gordon-Grube, Cheryl Z. Oreovicz らの研究がある。
- (3) Donald E. Stanford は作品を *New York History* に公開した。これを受けて Lawrence Lan Sluder は同事件をめぐるテイラーの博物学者らしい側面に注目し、詩作品の全般からも観察者の姿勢が発見されるのではないかとして再考を促す。テイラーの孫でイエール大学学長を務めた Ezra Stiles は祖父の遺稿を発見してアメリカ古代巨人説をとこなえた。スタイルズに関しては Cora E. Lutz を参照。
- (4) 資料には次の二点がある。Norman S. Grabo, ed., *Edward Taylor's Treatise Concerning the Lord's Supper* (Michigan State, 1966) および Thomas M. and Virginia Davis, eds., *Edward Taylor vs Solomon Stoddard: The Nature of the Lord's Supper* (Boston, 1981)。Michael Colacurcio が1967年 *American Literature* に優れた論文を発表し、これを受けて70年代に Kathleen Blake, 80年代に J. Daniel Patterson, George Sebouhian, 90年代に入っても Carol M. Bensick らが議論を続ける。邦文では、三宅晶子『エドワード・テイラーの詩、その心』（すく書房、1995年）、40—49ページに明瞭な説明あり。
- (5) 詩編解釈における John Cotton の影響については Jeffrey A. Hammond, “A Puritan Ars Moriendi: Edward Taylor's Late Meditations on the Song of Songs,” *Early American Leterature* (1982/83) を参照。Hammond による“The Bride in Redemptive Time: John Cotton and the Canticles Controversy,” *The New England Quarterly* (1983) は

コットンの神学を理解するのに有益である。予型論をめぐる Samuel Mather との関係では, Hammond, “Reading Taylor Exegetically: The Preparatory Meditations and the Commentary Tradition,” *Texas Studies in Literature and Language* (1982), および John C. Shields を見よ。Increase Mather とのつながりについては Karl Keller の論 (1978) がある。

- (6) 「生命の樹」はエジプト, アッシリア, ギリシャの古代神話や聖書などにあらわれる。テイラーの作品に関しては, Ursula Brum, “The ‘Tree of Life’ in Edward Taylor’s Meditations,” *American Literature* (1968) で注目され, その他 James Bray (1974), Cecelia Halbert (1966) らの論文でも扱われた。こんにちではテラー研究の基礎事項となり, 様々な研究で幅広く取り上げられる。
- (7) 詩の引用はすべて *The Poems of Edward Taylor*, Ed. Donald E. Stanford からおこなう。なお作品名は慣例に従い *Preparatory Meditations* (1st ser.) を Med. I. とし, 2nd series は Med. II. として, その後に作品番号を示す。引用した詩句の行数は丸カッコに入れてあらわす。
- (8) 引用は邦訳による。
- (9) 詩に関して抱かれる「幻想」には主として四種あると Harold Bloom は言う。詩は真実を伝えるとする「宗教的迷妄」, 統一性を備えると考ええる「有機体説的迷妄」, 一定の形式を持つととらえる「修辞学的迷妄」, ならびに意味を創出するとみなす「形而上学的迷妄」である (121-22)。
- (10) 「深読み」については Umberto Eco を参照。
- (11) 1960年代末から70年代初頭にかけて, この詩の解釈を Judson Boyce Allen (1970), Hartmut Breitzkreuz (1971), Lynn Veach Sadler (1973), Robert Secor (1968) らがつつぎつぎと試みた。
- (12) *Gods Determination* には三宅晶子『エドワード・テイラーの詩, その心』(49-192ページ) に邦訳がある。この訳から引用した部分は鍵カッコに入れて示した。

## Bibliography

- Allen, Judson Boyce. “Edward Taylor’s Catholic Wasp: Exegetical Convention in ‘Upon a Spider Catching a Fly.’” *English Language Notes* 7. 4 (1970): 257-60.
- Bensick, Carol M. “Preaching to the Choir: Some Achievements and Shortcomings of Taylor’s *God’s Determinations*.” *Early American Literature* 28.2 (1993): 133-47.

- Blake, Kathleen. "Edward Taylor's Protestant Poetic: Nontransubstantiating Metaphor." *American Literature* 43.1 (1971): 1-24.
- Bloom, Harold. *Kabbalah and Criticism*. New York: Continuum, 1983. 『カバラーと批評』(島弘之訳), 国書刊行会, 1986年。
- Bray, James. "John Fiske: Puritan Precursor of Edward Taylor." *Early American Literature* 9.1 (1974): 27-38.
- Breitkreutz, Hartmut. "Motif and Literary Genesis." *English Language Notes* 8.4 (1971): 267-79.
- Brumm, Ursula. "The 'Tree of Life' in Edward Taylor's Meditations." *American Literature* 3.2 (1968): 72-87.
- . " 'Tuning' the Song of Praise: Observations on the Use of Numbers in Edward Taylor's Preparatory Meditations." *Early American Literature* 17. 2 (1982): 103-18.
- Colacurcio, Michael J. "Gods Determinations Touching Half-Way Membership: Occasion and Audience in Edward Taylor." *American Literature* 39. 3 (1967): 298-314.
- Combella, C.R.B. "Taylor's 'Upon Wedlock, and Death of Children.'" *The Explicator* 29. 2 (1970): Item 42.
- du Bouchet, Paul. *Magnificat Jean-Sébastien Bach le cantor*. Paris: Gallimard, 1988. 『バッハ——神はわが王なり』(樋口隆一監修, 高野優訳), 創元社, 1996年。
- Eco, Umberto, Richard Rorty, Jonathan Culler, and Christine Brook-Rose. *Interpretation and Overinterpretation*. Ed. Stefan Collini. Cambridge: Cambridge UP, 1992. 『エーコの読みと深読み』(柳谷啓子・具島靖訳), 岩波書店, 1993年。
- Elliott, Emory. "New England Puritan Literature." *The Cambridge History of American Literature*. Ed. Sacvan Bercovitch. Vol. 1. Cambridge: Cambridge UP, 1994. 171-306.
- Fattore, Joan Del. "John Webster's *Metallographia*: A Source for Alchemical Imagery in the *Preparatory Meditations*." *Early American Literature* 18. 3 (1983/84): 233-41.
- Goheick, William J. "Edward Taylor's Herbalism in Preparatory Meditations." *American Poetry* 1.1 (1983): 64-71.
- Gordon-Grube, Karen. "Evidence of Medicinal Cannibalism in Puritan New England: 'Mummy' and Related Remedies in Edward Taylor's Dispensatory." *Early American Literature* 28.3 (1993): 185-221.
- Halbert, Cecelia L. "The Tree of Life Imagery in the Poetry of Edward

- Taylor." *American Literature* 38.1 (1966): 22-34.
- Hammond, Jeffery A. "The Bride in Redemptive Time: John Cotton and the Canticles Controversy." *The New England Quarterly* 56.1 (1983): 78-102.
- . "A Puritan *Ars Moriendi*: Edward Taylor's Late Meditations on the Song of Songs." *Early American Literature* 17. 3 (1982/83): 191-214.
- . "Reading Taylor Exegetically: The *Preparatory Meditations* and the Commentary Tradition." *Texas Studies in Literature and Language* 24.4 (1982): 347-71.
- Howard, Alan B. "The World as Emblem: Language and Vision in the Poetry of Edward Taylor." *American Literature* 44.3 (1972): 359-84.
- Keller, Karl. "Edward Taylor and the Mathers." *Moderna-Språk* 72 (1978): 119-35.
- Kilgour, Frederick G. "The Rise of Scientific Activity in Colonial New England." *Yale Journal of Biography and Medicine* 22(1949): 123-38.
- Lutz, Cora E. "Ezra Stiles and the Bones of the Giant of Claverack." *Yale University Library Gazette* 57.1-2 (1982): 18-25.
- Oreovicz, Cheryl Z. "Edward Taylor and the Alchemy of Grace." *Seventeenth Century News* 34. 2-3 (1996): 33-36.
- Patterson, J. Daniel. "God's Determinations: The Occasion, the Audience, and Taylor's Hope for New England." *Early American Literature* 22. 1 (1987): 63-81.
- Sadler, Lynn Veach. "The Spider and the Elf in Lovelace and Taylor." *American Notes and Queries* 11.10 (1973): 151.
- Schweitzer, Albert. *J. S. Bach*. 1908. Trans. E. Newman. 2vols. London: A. and C. Black, 1911. 『バッハ』全3巻(浅井真男・内垣啓一・杉山好訳), 白水社, 1983年。
- . *Zwischen Wasser und Urwald: Erlebnisse und Beobachtungen eines Arztes in Urwalde Aequatorial Afrikas*. Bern: Haupt, 1921. 『水と原生林のはざままで』(野村實訳), 岩波書店, 1957年。
- Sebouhian, George. "Conversion Morphology and the Structure of *God's Determinations*." *Early American Literature* 16.3 (1981/82): 226-40.
- Secor, Robert. "Taylor's 'Upon a Spider Catching a Fly.'" *The Explicator* 26.5 (1968): Item 42.
- Shields, John C. "Jerome in Colonial New England: Edward Taylor's Attitude Toward Classical Paganism." *Studies in Philology* 81. 2 (1984): 161-84.

- Sluder, Lawrence Lan. "God in the Background: Edward Taylor as Naturalist." *Early American Literature* 7.3 (1973): 265-71.
- Stanford, Donald E. "The Giant Bones of Claverack, New York, 1705." *New York History* 40 (1959): 47-61.
- Taylor, Edward. *The Poems of Edward Taylor*. Ed. Donald E. Stanford. Fwd. Louis L. Martz. New Haven: Yale UP, 1960.
- Warren, Austin. "Edward Taylor's Poetry: Colonial Baroque." *Kenyon Review* 3 (1941): 355-71.
- 芥川龍之介「湖南の扇」, 『芥川龍之介全集 6』全8巻, 筑摩書房, 1987年。50—70頁。
- イルシュ, アルチュール「J. S. バッハ, 生誕300年を記念して」, du Bouchet 190-93頁。
- 金澤正剛『中世音楽の精神史——グレゴリオ聖歌からルネサンス音楽へ』, 講談社, 1998年。
- シャイエ, ジャック「J. S. バッハ, 生誕300年を記念して」, du Bouchet 194-95頁。
- 魯迅『阿Q正伝・狂人日記』(竹内好訳), 岩波書店, 1995年。「薬」, 39—52頁。「狂人日記」, 15—32頁。

《譜面》

浅香淳編『新編 世界大音楽全集 器楽編 I——バッハ ピアノ曲集 I』, 音楽之友社, 1989年。

J. S. バッハ『マタイ受難曲』, 音楽之友社, 1976年。

《CD》

シュヴァイツァー, アルバート『シュヴァイツァーの芸術 I——J. S. バッハ 13のコラール・プレリュード』(TOCE-9196), 東芝EMI, 1996年。

---『シュヴァイツァーの芸術 II——J. S. バッハ トッカータとフーガニ短調』(TOCE-9197), 東芝EMI, 1996年。

---『シュヴァイツァーの芸術 III——J. S. バッハ前奏曲とフーガ』(TOCE-9198), 東芝EMI, 1996年。

リング, ヘルムート『J. S. バッハ 教会暦によるオルガン・コラール集』(COCO-85027), 日本コロムビア, 1997年。